

會



報

1955年5月

179

日本山岳會

前書き

世界の最高峰は一般に八八四〇米(舊高度)のエベレストとされている。だが良識のある登山家の探検家の著書を注意して読んでみると、必ず「おそらく」とか、「いわれている」とかいう文字が、あとか先かに附いているのに気がつくであろう。それはエベレストが世界の最高峰であるかどうか、必ずしもまだ決定的なものであるのではないことを物語っているものに他ならない。地球の上には、われわれに最も関係の深い部門においても、未だに解決されていない問題が相當に残されている。イエティ(雪男、雪女もいると思うが)の問題もその一つ、それからアジア、殊にチベット系の種族の住んでいる黄河の上流地方にある本題のアムネ・マチンも、世界中の登山家や探検家の野心(??)の的になつてゐるもの一つである。

★アムネ・マチンについて研究しようとする場合に参照すべき文献として、私は少くとも次のものを挙げておきたい。

The National Geographic Magazine (×印を除き著者 Joseph F. Rock の手記)
Nov., 1924 "Banishing the Devil of Disease Among the Nashi of Yunnan Province, China"
Apr., 1925 "The Land of the Yellow Lama"
"The National Geographic Society's Yunnan Province Expedition"
Sept., 1925 "Experiences of a Lone Geographer"
Nov., 1928 "Life Among the Lamas of Choni"
Feb., 1930 "Seeking the Mountains of Mystery"
Wilhelm von Fitchner, "Ein Beitrag zur Geschichte des Klosters Kumbum"
Eric Teichman, "Travels in North-West China"
Charles Bell, "The Religion of Tibet"

戦後最初の
アムネ・マチン探検

I

アムネ・マチンは果して世界の最高峰であろうか。その可能性はないでもない。

吉沢一郎

Pereira

Henry Hayden and Cesar Cossion, "Sport and Travel in the Highlands of Tibet"

最後に、最も新しいものとして紹介したいのは次の本であるが、表題だけではフイクションのように思えるので、餘り人目(登山家、探検家)を惹いていないらしい。

Leonard Clark, "The Marching Wind", Funk and Wagnalls Co., New York, 1954

pp. 368, \$5.00

われわれの仲間として昔からアムネ・マチンに興味を持ち研究していたのは藤木九三先輩と早大OBの四谷龍胤氏であるが、藤木氏は「岳人」第一號に「謎の山」アムネ・マチンの究明なる研究を發表した。

私自身は昭和十七年(一九四二年)から十八年にかけて「山と溪谷」に「黄河及び揚子江の源流に於ける三大山群」と題して、ロツクの三大探検記を前記の文献によつて紹介した際、その第一にアムネ・マチンへのものを書いておいたのと、昭和二十三年(一九四八年)三月號にその概要を紹介したことがある。

尚、本年(昭和三十年)一月の「山と溪谷」に新潟大学の永島教授が、アメリカの通俗雑誌で、O.C. Spencer という人の書いたものを紹介している。之には前記のクラーイクについて四行ばかりしか書いていない。

★さて之からクラーイクの探検を紹介する前に、それまでに解つていた本山群に関する概要を説明しておこう。

アムネ・マチン (Anne Machin) クラーイクの綴り——シナの地圖には阿木尼馬禪山或は阿尼馬卿山とあり、山脈は、最近の地圖には殆んど記載されているが、シナの青海省、甘肅省、四川省との會合點に近い、黄河の大屈曲點の北西に延びた山脈で、南崑崙山脈の末端とも考えられている。ロツクは Amnyi Machen と綴り、その語意を説明しているが、それに

よると、アムニイはチベット語で「老人」即ち「聖者」、マは「孔雀」、チエンは「大きい」で結局「大孔雀聖人」となる。別に積石山と呼ばれ、支那語大辭典によると

「積石山には二つあり、一を大積石といひ、今の大雪山にして青海の南境にあり、著名を阿木尼瑪勒古木遜山、蒙古語にて木素鄂拉」とある。

又、佛教の世界構造説並びにシナの伝説によると、今のマリーナサロワール湖(インダス河の支流、サトレジ河の水源地)の北岸に頗腹師子口あり、こゝより徒多河流れ出で、湖を一周して塔里木河となり、羅布泊に注ぎ、次いで潜流し、積石山に至つて再び地上に湧出、以つて黄河の淵源となる、とある。

この別名の方は之によると、可なり古い歴史をもつてゐるものらしい。この地方から西方に住むチベット人には、アムネ・マチンと發音している部族もあり、シナ名をマヒ雪山という、と記してあるものもある。

この附近に住む種族は九萬以上にも及ぶゴロク(哥拉克、才羅克)族と、その他のチベット族で、兩者の間には常に闘争が絶えない。中には三丈にも及ぶ長槍を持つてゐる者もあり、ある廟の中には、五十箇にも餘る輸入(?)の時計、コチョコチ、カチカチと動いていたりするものもある。又、彼等は外來者を極度に嫌う危険な種族であるので、文明人で彼等と膝つき合せ

て語りあつたものは殆んどなく、従つてアムネ・マチンを固く神秘な全溪谷、彼等を統治していると思像されては、全く伝承によつて知ること以外に方法がないことになつてゐる。

探検略史

アムネ・マチンを目標として最初に之に近づこうとした西歐人はフランスの探検家ラン（Dutreuil de Rhins）らしい。彼は一八九〇年代のはじめにアムネ・マチンを目指したが、ゴロク族に捕まり、皮袋に入れて紐でくくられ、黄河に抛り込まれて溺死してしまつた。

次がロシアの探検家ロボロウスキー（Roborowski）。彼は一八九五年の冬に來たが、マングンという峠の北東邊りで唐古特族のために追ひ返され、目的を果すことが出来なかつた。

ドイツの科學者にして探検家であつたフィルヒナー中尉（當時）——最近彼は「ネパールの炎熱地獄に」"In der Fieberhölle Nepals," Wiesbaden, 1953 という部厚い本を出した——は度々アジアの邊境を訪れているが、一九〇三年から五年にかけての旅行において彼は、蘭州、西寧、クムブム（塔兒寺）、タパ、沙拉呼圖、托素泊、鄂陵泊等を経て、巴顏喀喇（富める黒き）山脈の一部を踏査し、黄河の上流を大屈曲點まで下

降し、次いで四川省の松潘、碧口等を通つて蘭州に歸つた。従つて彼はアムネ・マチンの西部及び南部に可なり接近していることにな

る。

一九二二年にはアジア大陸横斷で有名なペレイラ將軍（Brigadier-General Sir George E. Pereira）が青海省の丹噶爾（湟源）を出發してチベットの首都ラ薩に向う途中、チユリ峠（トスン泊の北東に當る四四二〇米の峠）を越した日、即ち五月二十六日、三九六〇米の高所（ルアンチュアン平原）より南東に當り、群山を抜いて聳える白銀のアムネ・マチンを望み、高度約七六〇〇米という折紙をつけた。

彼がその翌年、雲南省の騰越で米國の探検家ロックに遇つた時、この時の話をしたのであつた。この時、ロックは遂に一九二五年の四月末に甘肅省の卓尼（二本松の意）に現れたが、種々の都合で翌一九二六年の晩春のある日、五カ月分の食糧と重要人物への贈物を用意し、いよいよアムネ・マチン探検へと出發した。

途中事故や事件でなかなか目的地に達せられなかつたが、最後に策略を用いて拉加寺（同徳）で黄河を渡り、シャチュエー・イムカール（Shachu Yinkar, 約四九〇〇米）の頂上から西方に、四五哩を距て、連亘する、白雪に被われたアムネ・マチン山塊を望見することが出来た。

最高部分は、彼によると、三峰よりなり——尤も之は後出のクラークの叙述とは違つてから御注意願いたい——北峰のドラランデル・ルン・シユク（Drandel Rung Shuck）が最も高く、次峰は南峰のチェンレジー（Chenzhi, 觀音菩

薩）で、山名の起りである中央峰のアムネ・マチンが最も低いことがわかつた。

彼は之以上その山塊に近づくことが出来なかつたが、白人で東方の斯くも近い位置から、實際にこの山を望見したのは、彼を以て嚆矢としてよいであらう。彼はその時この山の高度を約八五五〇米と目測した。之が事實となれば、日本から直線距離で最も近い八〇〇〇米級は、このアムネ・マチンということになりそうである。

一九三四年にフオールマン（Harrison Forman）は矢張りこの山を目指したが、同行者の二人は盜賊に殺害され、彼は命からがら逃げ歸つた。このことは嘗てシュミット（Fritz Schmitt）の著書で讀んだことがあるが、詳細は知らない。

尚ドイツの有名な博物學者シェーファー＝エルンスト（Ernst Schäfer, 彼は近著として次のものがある——Über den Himalaya ins Land der Götter (1950), Fest der weisen Schleier (1952), Unter Rubern in Tibet (1952)）は少くとも十一のアムネ・マチン遠征隊があつたがいずれも失敗したと述べている。彼も金沙江（揚子江の上流）流域の蓋古多（玉樹）まで進み、回教徒のために捕まつてしまつた。

佛教研究家のミゴト博士（Migot）というのも同じ目的で遠征したが、泥棒に遭つて裸にされてしまつたという。

ことを目撃しており、戦後一九四七年には米國のレイノーズ（Reynolds）が之を世界一の高峰として飛行機で探検しようとしたが、機體の故障でそれを中止したということが、新聞に出ていたことを記憶している。

最後に出て來るのが、之から御紹介しようとしてゐるアメリカ人レオナード・クラークの、足（馬の足か）でその間近かまで探検及び測量に行つた時の記録（一九四九年）であるが、昭和二十八年三月九日附の毎日新聞に、香港大公報の記事として、一九五二年八月二日から十二月二十三日まで、四ヶ月以上を要した、黄河水利委員會の派遣した黄河水源踏査隊の探検のことが出てゐた。

この記事は同踏査隊に屬した項立志、董在華の兩氏が綴つたもので、その旅程は次の如くなつてゐる。

開封（河南省）——青海省から黄河沿いに遡行——札陵泊——鄂陵泊——馬湧——（黃原の意、もと星宿海）——左漢山南側——喀喇渠（黄河右岸の支流）水源——梁曲合朗各拉山——色吾渠（揚子江上流通天河の支流）——通天河——曲麻萊河（通天河の支流）——遡行——拉不澤南北山々麓——約古宗列渠——同名の平原——左漢山南側——開封。

として地圖にも記されてゐた葛達素齋老山というのはなく、それに當るものが、ヤクソリ平原の西方三十軒にある雅合拉達合澤山（約五四四〇米）であること、等の發見である。

右の探検隊に測量班が參加してゐるところを考えれば、アムネ・マチン附近の測量もしてゐるであらうし、その後にも同じような踏査隊が出てゐる可能性も十分ある。然しこれについては今のところ何もわかつてゐないのが残念である。

全岳連と國體問題

全日本山岳連盟の結成式が五月十五日午後二時から東京、神宮外苑の日本青年館で行われ、招待を受けたので本會より石原評議員、渡邊理事が出席、石原評議員が會長代理としてお祝いのメッセージを朗読した。

岳連の會長には本會名譽會員武田久吉博士が推戴された。本會としては岳連の健全なる生長と發展を望むものであることに變りはなく、協力も吝しむものではない。本會内に設置される國體登山委員會を岳連との合同委員會とする、國體の運営に萬全を期せうとするのもその一つである。

尚各支部と岳連との關係は地方地方の事情の異なる點や、會員の意見を尊重して適切な方途を採るのを最善としてゐるため、まだ決定的な線は打出されてゐない。支部獨自の情勢判斷にまつて將來態度を決定することにならう。

（四頁五段目に續く）

山は心配である

★ 袋 一 平

私はかなり山を歩いたが、もとより登山家ではない。うでも、あしにも、自信がない。はたが心配してくれるよりも、まず第一に自分が自分で心配である。

どこかへ行こうと思いつくと、その瞬間から心配がはじまる。地図をひろげ、案内書と首つ引きで、コースをしらべる。等高線がつま

つていたり、ガケがあつたりすると、こんなところで肩の荷が急に重くなり、息が切れ、ガケからころがり落ちやしないか、と思う。この小屋からこの小屋まではだいぶある。途中で日が暮れたら、おカ

ンするような場所があるかしら？急に雨でも降つてきたら？夜明けに出発したら、あるいは次の小屋まで行けるかも知れない。そう

すると、この岩記號のところには、遅くも正午までには着いていなければならぬ。だが、その手前にコブが三つ——このコブの上下の

時間が問題である。三つ目のコブは頂上がだいぶだつ廣いようだが、ここで針路を誤るようなこと

はないだろうか？水場がないようだから、水は少くともこのガレ

まで保たせなければならぬ。この邊にくるのは、もう日暮れ近いだろうから、指導標のないこの分岐点でまごまごしたら、ひどい目にあう……。

コースの問題がどうやら一段落ついた。こんどは装備である。食糧である。必要と思われるものをザックにつめる。出發當日につめる新鮮食料や熱い飲料などを除いて、一應これでやれやれと思う。ザックをもちあげてみる。重い。大へん重い。これではとても歩けない。そこで電池の豫備とか、パ

ロメーターとか、代りのシャツとか、細引とか、なんとなかなくも間に合いそうなものをつま一つと減らしていく。もちあげてみる。まだ重い。チーズを半分に切り、砂糖を半分に減らし、氣つけ

薬の液體を三分の一ほど飲んで減らす。

荷物はどうにか片づいた。こんどは列車のこと、バスのこと、氣にかかると、バスがうまく連絡する

かしら？バスがなかつたら、八キロもテクらなければならぬ。すると山にかかつてからの時間の豫定が狂う。ハイヤー？しかし、

それに五、六百圓もとられたら、旅費の豫定が狂う。

最後に天気といういちばんの難物がやつてくる。毎朝毎晩、天気圖と首つ引きで、氣象通報を聞く。

経験によつて、これがなかなかうまくいかない。あまり信用しない。それでも「山寄りには小雨がバラつきます」なんていわれると、出ていく勇氣が出ない。雨が

大降りになるのを待つ。止んだとたんに出ていつたら、いいのではないか？だいぶ晴れがつづくから、もう天気は崩れるだろう。そこで雨を待つ。

★ 大きい山の場合も、そこいらの

ヤブ山の場合も、私にとつてはまったく同じである。さりげないような日歸りないし一泊程度の低山歩きでも、實に心配なのである。一週間も前から、地圖と案内書、ザックの出し入れ入れたり、天気圖と豫報とのたたかいで、ソワソワとおちつかない。

それほど臆病で、氣が小つちやくて、チェーホフの「箱のなかの男」が山へのぼるような用心で、山へ出かけるのなら、さぞ好条件にめぐまれた快適な旅をすること

だろう、と思うかもしれない。ところが、そうはいかないのだから、やりきれない。この道ばかりは、いくら萬全の注意と準備とをつく

したつもりでも、けつして萬全にはならないのだから、やつかいである。

たとえば、北アルプスの夏山には、さらに地元とも天候連絡をつける。よし、となつて出かける。雪溪をのぼつて、白馬の小屋へ着いた。あくる朝からドシャ降りである。同じ雪溪をくだつて歸つて

きた。あんまりしやくにきまつたので、長いこと機会をうかがつて、その秋、もう一度白馬へのぼつた。

神のタンボから大池に出て、尾根道にかかつたら横なぐりの雨。頂上であつた暗になり、危うく小屋にすべりこむ。それから秋の暴風雨が三日三晩も私たちを頂上小屋にとじこめた。

故立上秀二と槍平へ行つたときも、これは春のスキーであつたが、思いもよらぬバカ雪が今日も明日も降りつづいて、小屋のおしつぶされと、瀧谷のなだれの危険にひやひやした。

山で私たちを待つている。これを

鹽山から犬切峠を経て笠取小屋をめざした。このときも日暮れ道は遠く、およそ五度くらい、小屋の幻視になやまされた。鳳凰から早川尾根を傳つて、ついに仙水峠に達することができず、アサヨのてつべんで、岩のすき間にもぐつて、水一滴もない一夜を明かしたこともある。

スキーではがいて夏山ほど天候を心配しない。だから、私はナメツ坂と丸池とのあいだで（！）遭難しかつた。いきなり一メートル先きもわからない吹雪がきたのである。峨々から刈田の頂上へ出たら、霧でなんにもわからない。お宮のくぼみで、風と霧のときれるのを待つていた。

★ 避難といふことは、一歩ごとに山で私たちを待つている。これを避けることはできない。ただ人の力で避け得る場合には、その人の知識、経験はいうまでもないとして、その人の山にたいする心構え——注意と準備の程度に應じて、避けることはできる。マッチ一箱持つていたばかりに、それを持たなかつた人が死んで、自分を助かるという場合だつてあり得る。それにしても、人の力は絶対ではない。だから、私にとつて、山は、たとえ奥多摩の日歸り旅でも、非常に心配なのである。

先日、富士で遭難した學生の一人の身内の人が私の家にみえて、山の遭難について話が出た。私にはひとに話すほどの知識も経験も、まして判断も、なんら持ちあわせていない。私は前にいつたようなことを、ただまんぜんと話した。

登山用具の専門店

好日山莊

プライスリスト進呈

東京店 海野治良
中央區銀座西二ノ五 電話京橋(56)3600
大阪店 西岡一雄
北區堂ビル前 協和銀行三階
神戸店 島田眞之助
生田區三宮町一ノ三二ノ一

本草學者植村政勝の登山記

小林義正

今年は植村政勝著「諸州採薬記抄」(寶暦五年)出で、二百年目に當る。

三月中旬、雨あがりのよく晴れ上つた或る日曜の朝、私は程遠くない下北澤に森嚴寺を尋ねて下車した。かねて江戸時代の秀れた本草學者であり、登山家でもあつた植村政勝の墓が、此處にあることを聞き傳えていたからである。寺はちぎに知れた。山門をくぐり、大銀杏のある境内から古びた草葺屋根の庫裡を抜けると、そこに植村家の墓所があつた。廿數基の石塔の中で、一際大きい石碑の前に立つて、風霜に堪えた石面から回名を拾うと、正面に「明淨院殿曜譽觀山新甫居士」、左側に「俗名植村佐平次源政勝」、右側に「安永六丁酉正月八日」と讀まれた。

本草の研究は八代將軍吉宗の時代から盛んになったが、もと紀州公の家に庭方を勤めた氏が、初めて駒場御薬園預役に任ぜられたのが享保五年。爾來卅餘年の久しきに亘つて、その職にあるかたわら海内諸州を巡歴して薬草の採集と、研究に生命を打込んだ一途な情熱と向學心には、襟を正させるものを感じ、「諸州採薬記」九卷は元文五年(一七四〇年)に完成し、將軍吉宗に献ぜられたものであるが、今は植村家にも残っていないと、嘗て白井光太郎博士が述べられていた。しかし「諸州採薬

記抄」(九代家重に献ず)の方は、寫本として傳つており、幸い自分も一本を收藏しているの、いま同書から抄本が世に出た由來を聞いて見よう。

(前略) 右書は享保五庚子の夏より採薬の命を蒙りて諸國を巡行すること數ヶ年に及び、其際の草木及び經歴せし山海驛路のことも悉く書記して奉れと小笠原石州君より仰せありて九卷となし諸州採薬記と名付けて奉れ。其後又仰せありて卷數多くして事しげれば其中より珍らしき事のみをつめ記せよとあるに依て再び鈔出して奉ること然り

と。因に筆者所藏の寫本には次の書入れが施してある。按に家重公とは徳川家九代惇信殿と號す。寶暦十一年六月十二日歿せり。小笠原石州となるは其頃の小姓小納戸役(石見守と任官)せしものなるべし。

政勝が編歴した諸國は同氏自記の「諸國相廻候日記見出し帳」に詳いて、採薬のため高山植物を搜めて登攀した主な山は、日光、奥州、出羽、甲州、武州、奥丹澤駿河、飛騨境、美濃、信濃から紀伊、伊賀、大和の諸地方に及んでいる。

「採薬記抄」の上巻は「青梅山金剛寺御朱印二十石、此寺に梅樹に青梅絶えず、四季共にあり依て青梅の稱あり」という武蔵國青梅村から筆を起し、以下伊勢、志摩、紀伊から淡路、土佐、伊豫國に及び、反轉して下野國に入り、日光のことに觸れているが、興味深く

且つ氏の登山記として眞骨頂の窺えるのは、富士と鳥海登山記の項にあると思われる。史上、本草學者や漢方醫で藥草採集のため、深山幽谷を跋涉した人の數は必ずしも尠くないが、多くは各藩侯の封内の山中を採集したもので、足跡が廣く海内の諸山に及び、しかもよく困苦に堪えて使命を果たした人は、割合に尠い。

植村政勝の富士登山は、享保九年六月廿九日未の刻から始められた。六七分通りまで登つた時、大雷りが三ヶ所に鳴ると共に、忽ち雨が下から吹き上げたが、次第に雪に變ると嚴冬のような寒さが迫つて來た。其夜は岩屋で草鞋も解かず、身體を上下にこすりながら明かしたが、小舎の入口には雪が一尺二寸程も積つたといひ、六月に降雪のあるのは、甚だ珍らしいことであつた。夜中は非常に困難したが、漸く翌朝に至り、日の出頃には雪水に濡を浸して含み、降り積る雪を拂つて下山、袖かき合わせつゝ下つたが、夕方七時頃五里程下つたところで黄昏となり、野宿した。糧食は麥粉のようなものを含んで、雪中に凍苦を凌いだ、が、嚴寒にも似た辛勞は言語に絶したと書き残している。

同じく下巻に於ては、越中立山に就て記し、登路のこと、頂上の展望、山中の模様など述べているが、茲にその後半の文章を引用する。

此釣橋を越し段々に難所を過ぎ雪を踏み分て五里程行けば又壁を立てるよりなる岩上を一里程登り其上に立山権現の本社あり九間に二間南向なり、左に彌陀

中に寶藏右に不動なし、此處より東の方に日光山、南の方に信州淺間山、飛州乗鞍山等見ゆる、當山の開基慈興上人天寶元年より元文年間迄千四十有餘年になるといへり、此處の寶藏に什物種々ありといふ、山中に「里程の湖水あり、此近邊より温泉わき出る、是を立山の地獄といひて參詣の人を迷わし錢を出さしむなり又山中に鳩といふ鳥あり、雉子の雄に似て冠ありて美しき鳥なり、此山の名鳥なりといふ、立山は險難にして富士へ十度登るよりも一度登る方甚だ辛勞すといへり、四國の僧も山上までは行き送る者百人に一人もなし、六月十日より同十四日迄予此山中に居ること五日なり、今年時候は例年と違ひ暑熱強き方に覺ゆれども此山の雪ふかきこと一丈四五尺なり、水を求むれば雪を器に入れ火を焚き解して水となし與う雪深くして水甚だ冷かなり、何を煮てもにえかぬるゆゑ食物は糲團子等のほか用いがたし、甚難難の地なり、雪深きことは例年にて酷暑の節にも一日も雪消ることなし。

と。更に讀み進んで、出羽國鳥海山の項に至ると、同國鳥海山、日に四ヶ處の高山なり、麓の村より山上迄道法六里餘なり、四里半程登れば四季ともに雪消すといへり、誠に雪もて築き立てる山のごとくに見ゆるなり。

と述べ、享保六年命を受けて此山に登ると記している。閏七月朔日午の刻から登り始めたが、六七合目に着く頃から大風雨に見舞わ

二頁より続く

地方會員の中には岳連に加盟しなければ國體登山に参加できないのではないかと疑問を持つてゐる方があつた。ところが、國體參加の資格は國體登山委員會に登錄した團體に所屬するものに限る。(七頁・國體登山委員會規定案參照) ということになるので、岳連加盟の如何によるものでは決しないことを承知しておいて下さい。

たとえば山形支部が全岳連に加盟していない場合でも、縣體協を通じて日本山岳會内國體登山委員會に登録すれば、同支部に屬するものは選手たる資格があるわけです。



カワミヤのアルパインソール

耐久・不磨耗・滑止

あらゆる点で NO 1

合資会社 代表 平林三郎

カワミヤ靴店

東京都大田区大森 8-3740

TEL (76) 5882

れ、「山鳴り谷響きて砂石を飛ばし、風雨を搏によりて起居動靜心に住せず……」また「誠に十死に一生を得……」云々と述懐する困難に遭難した。このとき、谷へ吹き落されたが、續く従者もなく、あまりに強い風雨に、腰帶を解いて岩の端に引かけ、確保を圖ると共に、かねて用意した朝鮮人参を口に含み、漸く氣力を補いつゝ風雨を凌ぐと述べているのも、如何にも本草學者らしい。

此時懷中の品其他用具等も打捨て心中には唯々日域の大小神祇を念じ平日信仰の佛名などを唱うるのみにて誠に露の命は風前の燈火の如く只に死を待つより外他事なかりし。

つき、前日卯刻に食事したなりの餓渴を醫やしているが、此時の風雨のすさまじきは、郷民も七八十年傳え聞かぬものであつたらしく、以後高山に登らんとするならば、前後三四日も日を見極めて後に登山すべしと自戒したのち、歸府の上は尊敬の神佛に詣で、此の報恩を謝すべしと結んでいる。以上が「探案記抄」に記す富士、立山、鳥海登山記の大意であるが、其文にあながち實感以上の誇張があると思ふのは當るまい。それは比較的平穩な天候の下に登山したと想像される立山に於ての觀察からも窺えるし、科學者らしい態度や闘志の陰に見える沈着さなど、今から凡そ二世紀餘りの年代の隔りのある當時に於て、矢張り秀れた登山者の一面を備えていた人と云えよう。

(一九五五・三・二〇)

山人、大倉辯次郎君のこと

貴堂武時

私が大倉辯次郎君の名を初めて知つたのは「登高行」に載つた佐伯龜藏君の追悼文によつてであつた。この常願寺川源流の山々で育つた猛者と神通川の谷々で鍛えた秀れた狩人辯さん（私達の仲間はこの名で呼んでいた）が偶然に黒部源流のどこかで遭遇した際、越中衆の龜藏が辯さんに谷筋をきいたと云う。ところがどうしたのかと辯さんはとんでもない道を教えたので龜藏は途中からかの飛驒

私達が金木戸川から藥師岳方面に登つた際、黒部奥山の山々を眺める高原の道すがら友人の一人が辯さんに尋ねたところ彼はこの無邪氣な事件を忘れたか、照れたのかあいまない笑いで胡麻化してしまつた。

蒲田の谷に中島政太郎、今田兄弟等が山案内として威勢を張つていた頃、彼等程一般的に名は知られてはいなかつたが、私は「山想」に載つた會員田中菅雄、土屋鐵雄

衆にうまく謀られたのに氣付いたが引き返すのがごう腹でそのまゝ惡場を乗り切つたと云うのである。

しかし彼が狩人としての特質を生かしての山案内だけでは、當時（昭和七、八年）彼のお客さんつて行を共にすること都合悪くなつて来たこともよく知つていた。そのため私達と山行を共にした頃は苦勞してスキーを付け、ザイルの使用の勉強に熱心であつた。私が彼と行を共にした冬山は殆んどスキーの使用することのないものであつたが、それでも根據地まではスキーを使用することが多かつたので輪様では猛者の彼もスキーでは冷汗やら、脂汗でついて来た。

（共に故人）兩氏の等の三月の笠ヶ岳、西穂高岳、登山、倉木戸川より湯殿の下つた紀行等にでてくる辯さんのこと、又兩氏の話等で身近か知つたこと、それから其後私のよい山仲間の人となつた。

その彼のスキー技術は其後どれ程になつたか私は知らない。私があつた山に登らなくなつてから二度私宅を訪ねてくれたが一度は私が山行中で會えなかつた。神通川の山峽の片隅に生活し、山畠に豆や稗を作つているところから耕地整理された一望の青田を眺める私宅に着いた時は驚異であつたらしい。一泊し土産の西瓜を持って餘しながら山へ歸つて行つた。

要とすることは次第に少なくなり昭和初年頃より登山の主潮とも云うべきものが現在の方法をとるようになつてからは急激に之等山案内者が活躍する時代は去つた。だから私の感懷は今のやうに山人と交渉をもつことのなくなつた若い人達には理解出来ないのではないだろうか。

登山報告にはこのやうな山人は現われてこないし、いつの頃からか「山日記」からも山案内の欄は消えてしまつた。

最近芦峯案内組合の名簿をみるとがあつてその組合長に往年、立山の積雪期初登攀の随伴者中、最年少者だつた志鷹光次郎君の名を知つてその健在を知つた。多分私の知つている山人のうち活躍している最後の人はないだろう。尤も志鷹君は辯さんと異つて仲々の近代人である。

今後山案内人は減少するばかり、山案内人を随伴する登山と云うものがなくなり、山案内と云うことは歴史のものとなるだろう。

既に紅葉のある寒い朝、この日も辯さんはいつものやうに遠い山畠へ一人で出掛けた。そしてそのまゝいつに歸らなかつた。翌朝文字どほり五十幾年の歳月を風雪にさらした頬の高い顔を霜にぬらして發見されたのだつた。

「拜啓、先日はお手紙下さいまして私家の者にかかりまして心から御禮申上げます。私の父は昭和二十五年十月二十四日死亡いたしました。私の家では朝山へ行つたきり夜になつて歸つて来ませんし、それでどこかに宿つた事と思ひ一夜をすごしました。次の朝父は亡

ヒマラヤ覚書

★再びランペール隊（一九五四年）のチヨール・オユー攻撃について

首記に關して會報一七七號以外のことがわかつたので補足しておく。

（隊員名）Raymond Lambert（隊長）Franz Claude Kogan, Dr. Franz Lochmatter（醫務）, Denis Berthollet（算術）, Jean C. Juge教授（物理學者、地形學者）, Albert Zimmermann.（植物）, Marc Stengel（植物）

【行動】

Gaurisankar (7145 m) と Me-nlungtes (7181 m) を踏査したが、兩峰とも登攀不可能とわかつて放棄した。

チヨール・オユーにおいては、BC (5640 m), C1 (6090 m), C2 (6500 m), C3 (6850 m), C4 (7200 m) で、オーストリア隊のティッヒ隊長とは接觸を保つて行動したが、彼等は先に踏査から攻撃に移り、十月十九日登頂に成功した。

然しランペール隊はティッヒ隊の成功と不成功に拘らずキャンブを進めて行つた。強風が吹いていたので、テントは張れず、雪や氷に穴を掘つて泊場とした。気温は大概零下二〇度C。

ロッホマッターとベルトレットは荒天のためC3に釘付けにされていた。コーガンとランペールはC4に六日間、零下三〇度Cの許で閉ぢ込められていたが、十月二十八日頂上攻撃のため出發した。然し悪天のため七七〇〇米までし

か登れなかつた。

十月二十九日、ジューグ教授はC4を發し、南峰（七四一〇米）に達し、地質調査を完遂した。

それから毎日気温は低下し、風も劇しさを加えて來たので、チヨール・オユーの第二登頂は遂に諦めてしまつた。然し決断が適切だつたので、全隊員が凍傷に罹ることもなく無事にBCに戻るこ

とが出来た。彼等は十一月五日にナムチェ・バザールに歸り、十一月十六日、カトマンズにおいてAFPを通じて前記の行動をはじめ世の中に發表した。

尚、ソ連の登山家達が今度はいよいよヒマラヤに進出する可能性が増して來たやうである。七千米の山はバミールにも天山にもある。然し八千米級はソ連バロパーにはない。彼等の訓練も相當行届いてゐる筈である。そろ／＼今年邊りはまず中共の勢力が及んでゐるチベット南境の山々が狙われても不思議はないであらう。八千米以上乃至はそれに近い山としてチベット國內にあるのはゴサインターン（八〇一三米）、グルラ・マンダータ（七七二八米）、それから、方面は違ふが黄河の上流には問題の山、アムネ・マチンがある。詳細は本號別項に誌した通りである。

★ハウストンとベイツの略歴

Charles S. Houston

アメリカの最も優れた登山家の一人。一九一三年NY市に生る。一九三五年、A、B學位を得てハーバード大學卒業。コロンビヤ大

★圖書紹介★

島田 巽 著

ふだん着の英國

「ふだん着の英國」は著者、島田巽氏が、一九五一年五月から一カ年、朝日新聞社の特派員としてロンドンを——プリンティング・ハウス・スクエアを、と「タイムズの内外」の章を読んで言いたくなるが——中心として、ヨーロッパ十三カ國を訪れた、その間の見聞記など二十四章と「山」に關連した八章とからなつてゐる。既に日本山岳會の「會報」や「山岳」や新聞の上で、その幾つかを読んだ私は、それらが一冊の本となつて現れるのを待つてゐた。選ばれた書名も誠にいい。

島田氏はその前著「今日のヨーロッパ」の中の「新しいイギリス」などで、その社會生活について述べてゐるが、イギリス人そのものについての觀察である、巻頭三六頁を占める「英國人の七つの癖」は、戦後のイギリスについての、英文學者、文筆を業とする人々、また新聞關係の人々によつて書かれたものの中でも、特に興味深く私は読んだ。また、これは、ほんとはなかなか書くのに、むづかしい事柄ではないかと思う。著者は、彼自身、常に日常服で、日常服の英國人と日常の話しか交さなかつた。また、戦後の英國の社會がかなり「ふだん着」化して來たと考えられる、とその「あとがき」に述べてゐる。そこで、私は「ふだん着」とは、どんな着物を一應考へてみた。相手が「ふだん着」であつても、こちらが、そうでなかつたら、ほんくらに「ふだん着」たる所は現れないだらう。

著者はイギリスへ行くからといつて、新調の洋服の中に固くなつてゐるのでもなければ、また、汚れた、だらしない「ふだん着」を着てゐるのでもない。着なれた「ふだん着」で、相手の上になつても、下になつても、そのまゝ交つてゐるやうな感じを受ける。これは、何年と、その國に住んで來た人とはにかく、誰にでも出来ることではないと思ふ。また、ことによると「ふだん着」という氣持も、人によつて異なるのではないかとさえ考へた。例えば、自分の家の中では、うちの人々のゐる前では、だらしない格好をしてゐたくなひ、としたら「ふだん着」でいて「よそ行き」の氣持だと、殊に此頃のおが國の人々のうちには思ふものがあるのではないかと疑うのであつた。著者がこの本の随所で、うれしい目に會つた自分を幸福者とするこび、また、とり逃した——例えば、シブトンの講演をきき損う場合など、實に残念がる態度に好感が持てるし、何となく、その國の一般の人々に好意を抱いてゐる様子も氣持がいい。私自身、取調べるやうな「オレはだまされないう」といふように見える態度をあまり好まないからだらう。しかも、何でもないうやうな他の人ならば、見落してしまうやうな事柄を、しばしば、著者は率直に喜んでゐる。何でもないうに書いてゐることが章の終りの☆

（5頁より続く）

き死體となつて發見されました。豆をかけるハサ（架木）を作る穴をほつたまま穴の中に顔をこみ死んでしまふ。醫者にみてもらひましたらノウイツケツと云う病氣でした。皆様によくお願いいたします。お體に氣をつけて働き下さい。敬具

長い間會はなかつたあげくにこの通知を受取つた日は人生不可避のことながら矢張り感傷の終日であつた。（三〇、三）

☆短い言葉で輝いてゐる所がある。そして、鋭く物事の大切な點をつかんでゐるのである。著者が詩を愛好する所も、うれしく読んだ。グラランチェスターの詩人は私の好きな章である。私は、これらの詩を英文學者の専有物とは思つてゐない。私なんかもThe Soho BibliographiesからRupert Brookeが出たと知つては、欲しくて困つてゐる一人なのである。「テームズに添つて」や「ロンドン郊外」などの章を、ちやうど一冊の中のインタメツトという感じをもつて読んだ。何でもないうカントリサイドの風物の描寫がたくみだと思ふ。

終りに、「二七三頁の「紅たまご」に始まる「山」に關連した文は一般の人々にのみアピールすると思ふ。サー・ジョン・ハントの「エヴェレスト登頂」などから、一般の人々の受けた感動は、所謂、山登りの人々の受けたものに比して、優るとも劣らないことを、私は知つたからそう思うのだ。また

學の内科、外科部に入り、一九三九年にMD（醫學博士）の學位を得た。一九三九年—一九四一年までNYのプレスビテリアン病院に勤務、同年秋、海軍に入隊、パール・ハーバー事件の直前、航空隊所屬外科係將校となる。

一九四二年二月、フロリダ州ジャックソンヴィルの海軍航空隊基地で高度訓練隊を組織し、同年末マイアミでもそれをつくった。一九四二年—一九四六年まで航空兵の高度訓練に従事し、その間三萬五千人から四萬五千人の生徒を教育した。海軍生活の終りにペンサコーラに移り、「エベレスト作業」と呼ばれていた高度馴化の研究をやっていたが、これは海軍から小冊子の形で出版されている。一九四六年に海軍から離れ、少しの間NYのベルヴィュー病院に籍をおき、ついで現場のエクゼクティブに移り、一九四七年四月に友人と一緒にエクゼクティブ診療所を開いた。

登山歴としては十一歳の時に父に連れられ、スイスに遊んで、アルプスに親しんだのが最初。アラスカには二度遠征し、ブラッドフォード・ウォッシュバーンとクリヨン山登山（一九三三年）、三四年にはフォレイカーの初登頂。三度アルプスを訪れ、かなりの登攀を行っている。一九三六年にはじめてヒマラヤ行き。英米混合のナンダ・デヴィ隊に参加、サポート隊として活躍した。一九三八年K2遠征、一九五〇年、父親とチャンボチェ僧院を訪れ、西洋人としてはじめてエベレストの南西面を探った。ティルマン参加。

Robert H. Bates

一九一一年、フィラデルフィアに生る。家族が毎夏ニュー・ハンプシャーに過した関係で、八歳の頃には既にホワイト・マウンテンの主なる山々に登っていた。

一九二九年ハーバード大学へ入學した當時、B・ウォッシュバーンその他と眞剣に山と取組んだ。一九三二年と三三年にはウォッシュバーンとアラスカのフェアウェザー山群へ遠征。三五年には國立地理學協會隊にウォッシュバーンと参加、ユークン地方の南東部を探り、三七年には同じくB・Wと當時の北米における未登最高峰ルカニアに登った。

一九三八年、ハウストン等とK2遠征、七九〇〇米まで達してアメリカ人としての最高記録をつくった。この遠征からバイツ編集の「Five Miles High」が生れた。

一九四一年十月、軍事省顧問、大戦勃發直後將校となる。極地用裝備の研究を命じられた。一九四二年、マッキンレイに登ったアラスカ地試験遠征隊の實行委員となり、輕裝備問題に幾多の貢獻をした。後食糧配給局の特別顧問としてイタリアに赴き、終戦の時はそこで中佐となつていた。

一九五一年には北米極地研究班の隊長としてユークン地方の國境に聳えるハバード及びアルヴァストンの兩處女峰に登頂。一九五三年、K2遠征。

ペンシルバニア大学（一九三五年—一九三九年）とフリスツプス・エグゼクティブ・アカデミー（一九三九年現在）で英語を教え、四七年、ペンシルバニア大学から哲學博士の學位を授けられた。

逆に、山登りの人々も「英國人の七つの癖」を見落してはならないだろう。エヴェレスト遠征隊員にしても、そのイギリス人なのだから。「紅たまご」は誰にとつても氣持のいい一文である。そのあとの「エヴェレストの氷斧」「ヒマラヤ遠征と英國の人々」「ウエル・ダン」

國體登山委員會その後の経過について

會報一七八號に中間報告しました國體登山委員會は、その後關東岳連と協議、更に日本體協吉田國内部長の意見も徴した結果、次の如くその規定（案）を作成した上、關東岳連に手交、検討中であり、可及的速かに發足したいと考えています。

國民體育大會登山部門委員會規定（案）

第一章 總則

第一條 國民體育大會登山部門（以下國體と略稱）の圓滑なる運営を期するため社團法人日本山岳會内に國民體育大會登山部門委員會（略稱國體登山委員會）を置く。

第二條 本委員會は社團法人日本山岳會（以下山岳會と略稱）と全日本山岳連盟（以下全岳連と略稱）との合同委員會とする。

第三條 本委員會の事務所は山岳會内におく。

第四條 本委員會は國體に關する事項を處理する。

第五條 各都道府縣體育協會（以下縣體協と略稱）に所屬する山岳會支部、山岳連盟（協會）は本委員會に登録することとする。

第六條 登録は所定の申込書に登録料

など、ことエヴェレストに關してとなると、何といつても感動が深い。

著者は謙遜な「あとがき」を書いているが、これらの文は流暢な筆致をもつて書かれていて共に、一冊の書物としてのこの貴録を具えていると私は思う。こゝに

金二〇〇圓を添へ縣體協を経由して毎年

月 日までに申込むものとする

第七條 國體に選手として参加し得るものは登録團體に登録するものに限る

第八條 本委員會に登録しようとする團體はアマチュアでない構成員を含んではならない

第三章 役員

第九條 本委員會の役員は委員長、常任委員、特別委員及び委員とし必要に應じて顧問、參事等を委嘱することが出来る

第十條 委員長は山岳會々長とする

第十一條 常任委員は左より選任する

一、山岳會の推薦するもの 五名

二、全岳連の推薦するもの 五名

第十二條 特別委員は左より選任する

北海道、東北、關東、北陸、中部、關西、中國、四國及び九州の各ブロック内の登録團體を代表するもの各一名

第十三條 委員は登録團體が各一名ずつ推薦する

第十四條 役員の任期は一年とするが重任を要しない

第十五條 役員に缺員を生じた場合は前各條により補充する、補充役員の任期は前任者の残任期間とする

第十六條 委員長に事故あるときは常任委員の互選により委員長代理を選任する

第十七條 本委員會の會議は委員長及び常任委員會と委員長が之を招集してその議長となる

第十八條 會議の議決は總て多數決とする

第十九條 委員會は本委員會の最高意思決定機關であつて、毎年二回五月と國體開催時に開く、但し常任委員會が必要と認めるとき又は委員の五分の一以上のものが連名で議案を明示して委員會の招集を請求するときは三十日以内に臨時委員會を開催する

畫と音樂も現れて欲しいというのは、私の勝手な注文なのだが、そうなる、と目も耳も二つずつでは足りないかもしれない。

暮しの手帖社・一九五五年二月刊行・三五〇頁・著者撮影の寫眞一八・定價三五〇圓。

田邊主計

第十九條 委員會は常任委員、特別委員及び委員を以て構成し、委任状による出席を認める、但し二以上の役員を兼ねるもの議決権は一票とする

第二十條 常任委員は、本委員會の執行業務を處理する

特別委員は常任委員會に隨時出席して意見を述べることが出来る

第二十一條 會議の招集には議案を明示して、委員會は招集日を含む二十日以前、常任委員會は同日以前にその通知を發送する、但し緊急の場合はこの期間を短縮することが出来る

常任委員會の通知は特別委員にも發送しなければならない

第二十二條 會議の議事録は本委員會の全役員、登録團體に送附する

第五章 會計

第二十三條 本委員會の經費は山岳會及び全岳連の支出金及びその他の収入をもつてあつて

第二十四條 本委員會の會計年度は毎年四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る

附則

第二十五條 本委員會は社團法人日本體育協會が全岳連を認認するまでの機關とする

第二十六條 本規定による委員會成立と同時に従來山岳會内にあつた國體委員會は解散する

第二十七條 昭和三十年度の登録締切日は第六條の規定にかかわらず昭和 年 月 日とする

第二十八條 第一回就任の役員の任期は第十四條の規定にかかわらず昭和三十一年度就任後とする

第二十九條 本規定は昭和 年 月 日より施行する

カラコラム隊

への期待

四月の初め大阪の諏訪多君が遊びにみえた時、京大のカラコラム・ヒンズークシ遠征隊は邦人が初めてカラコラムの氷雪に接するのだし、行く人のなかには山岳会の會員も何人かいるのだから、支部あたりでは是非いちど話をきく機会をもちたいというようなことを話したつたが、月の終り頃になつて關西支部の有志が今西錦司氏を圍む會を開くという案内をうけ、大阪の急行電車に乗つた。

出發直近の多忙をくり合わせて出て來られた今西さんは、その夜カラコラム支隊の計畫を、ごくありのまゝに話された。概要は新聞にも大きく發表された通りだが今西さんの當初の希望は、バルトロからシヤチエン氷河へ越えることにあつたようだ。それは上下一三〇キロに餘る氷河の旅であり、まだこれをやつた者がないと聞いては、今西さんならずとも、それがやるに値する旅だと思ひに違いない。しかし年齢やパティの性質を考え、今度はギルギットを出発したら、ヒスパールからピアフォ氷河へ越え、バルトロはコンコルディア近くまで往復することに變えたのだと云われた。バルトロからの歸路は再びピアフォを上り、ヒスパール・パスの附近からクルドピン氷河を下つてシムシャルの僻村を訪れ、フンザ河畔へ出ることに

で計畫の前半を終るそうである。

ヒスパール・パスからはシムシャルへ下るのは、シプトンの書いたものから暗示を得たルートで、無論まだ誰も

通つたことのないものだそうだが、これなどはまことに今西さんらしいプランだと思われた。シムシャル側からのディスティグやカンジュット山群の大観は、從來餘り見た人がないし寫眞もごく少ない筈だから、もしこの附近の山の寫眞が將來されたら、それだけでも大きな收穫と云えるだろう。

先發員からの連絡で、ワカン溪谷は入れそうになく、計畫の後半に豫定されたチリンジ峠（カラコラムの北西隅）も通行が許可にならないことがわかつたので、勢い計畫の前半に力を入れなければならなくなつたといふことも、當夜聞いたことだ。フンザ河からバルトラ氷河源頭の山群を一周して、イシコマンのカルンパール川へ越えるルートが通れなくなつたことは、この附近にカンビール・デイオールなどの山々があることから、いかに残念だが、ギルギット河の奥地にはロングスタッフも書いていふように、地理民俗の方面で多分に興味ある問題がある筈なので、後半の收穫はその方面で多く期待しよう。なお、こゝへ入る時季はおそらく秋の頃だから、秋空を背にしたヒンズークシの雪山は想像するに素晴らしい眺めであらう。

目的は學術探險的なのだが、行く場所が登山者垂涎の地であるだけに、會としても大きな期待を今西さんらに寄せていゝ筈である。お土産話のきける時を待つてゐる人はけつして少なくないであらう。

望月達夫

秋田岳連春山講習會
講師派遣報告

秋田縣岳連から本會宛、講師派遣依頼があつたので大塚博美、高橋進兩名が派遣された。以下その報告である。

講習會参加人員は縣下大學、高校、社會人の四十六名。
五月一日 晴 吹浦口より入山
駒止の營林署小屋を根據地とする。

二月 快晴 楽しく登頂、小屋から頂上まで一六〇〇米の標高差、歩きデであり。雪は小平小屋から頂上まであり、特に御濱小屋附近の残雪は豊富で楽しませられた。千蛇谷のカールの美しさ、頂上よりの三六〇度の眺望雄大なり。山を楽しく歩くことを皆でテーマに考える。

三日 晴 葛石坂斜面で歩き方、ピッケルの使い方、スリッパ止めの練習、スキーを楽しむ。

四日 暴風雨 停滯

午前歌の指導、午後一山の危険のいろいろ討論會、夜は演藝會。ヒュッテマナーも良好で停滯はしたが充實した一日であつた。

五月一日 雨後曇 吹浦口に下山。
地方の登山に對する眞面目な情熱は驚くほどであり、技術の指導啓蒙は遭難防止の最上策と痛感した。（大塚博美）

昭和二十九年年度収支決算表

収入之部				支出之部			
摘要	豫算金額	決算金額		科目	豫算金額	決算金額	
經常收入	五〇〇,〇〇〇	六四六,三三〇		I 事務費	二四,〇〇〇	二六,〇〇〇	
入會金 六人	三〇,〇〇〇	四九,六〇〇		俸給及手當	二六,〇〇〇	二六,〇〇〇	
會費(都内三〇人、(地方五〇人)三〇〇人)	二〇〇,〇〇〇	二四六,七〇〇		文具費	三,〇〇〇	九,六〇〇	
前年度會費	四〇,〇〇〇	五五,五〇〇		印刷費	一〇,〇〇〇	二六,六〇〇	
事業收益	三二四,五〇〇	二四一,八四〇		通信費	六,〇〇〇	八,六三〇	
會報廣告料	六〇,〇〇〇	六四,五〇〇		交通費	五,〇〇〇	二,四四五	
山岳 "	一五,〇〇〇	三,〇〇〇		雜費	六,五〇〇	九,五〇〇	
山日記領布益	八,〇〇〇	五,〇〇〇		II 管理費	一四,〇〇〇	一三,〇〇〇	
國體事務交付金	五,〇〇〇	五,〇〇〇		諸稅	一四,〇〇〇	九,三〇〇	
會員章賣上	一,五〇〇	三,八五〇		火災保險料	六,〇〇〇	七,四五〇	
山岳賣上勘定	三,〇〇〇	三,六八〇		修繕管理費	一〇,〇〇〇	一五,三〇〇	
山日記賣上手數料	四,八〇〇	四,八〇〇		光熱費	一五,〇〇〇	三三,九〇〇	
貸室料	四,一〇〇	四,一〇〇		電話料	一八,〇〇〇	三三,一七五	
雜收入	七,五六六	七,五六六		消耗費	四,〇〇〇	三,三三〇	
東京支部ヨリ經費分擔繰入	五,八五〇	五,八五〇		III 事業費	五七,〇〇〇	六九,九六〇	
寄附金	一〇,五〇〇	一〇,五〇〇		雜費	四,〇〇〇	二,四五〇	
圖書整備勘定	一八,二〇〇	一八,二〇〇		會議費	二〇,〇〇〇	二〇,〇〇〇	
計	九四,五〇〇	九六,一四四		小集會費	二〇,〇〇〇	二〇,〇〇〇	
不足金處理計算書	七九,八七〇	七九,八七〇		山日編輯費	四,〇〇〇	七,九五〇	
本年度繰越不足金	六八,八七〇	六八,八七〇		圖書費	三,〇〇〇	四,六八〇	
前年度繰越不足金	六八,八七〇	六八,八七〇		會報發行費	二六,〇〇〇	二六,〇〇〇	
次年度繰越剩餘金	一四,九〇〇	一四,九〇〇		山岳 "	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇	
				交通費	五,〇〇〇	六,一八〇	
				國體費	二,〇〇〇	二,〇〇〇	
				渉外費	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇	
				豫備費	一,〇〇〇	一,〇〇〇	
				雜費	二,〇〇〇	二,〇〇〇	
				名簿	二,〇〇〇	二,〇〇〇	
				IV 圖書整備勘定	六四,一四〇	六四,一四〇	
				V ヒマラヤ勘定	二,六八〇	二,六八〇	
				差引剩餘金	二四,〇〇〇	二四,〇〇〇	
				合計	九四,五〇〇	九六,一四四	

カトマンズから

カトマンズというところはカル
 カッタ等にくらべると涼しくて空
 氣も乾燥しているので非常に凄
 易く意外でした。四圍低い山に
 まれていますが、赤土の肌は甲
 盆地を思わす様な所です。

今泊っているところはクリシユナ氏の知人の宅ですが郊外で静かです。窓からの景色は内地とチツトも變りなく牛の聲や鶏の聲が軒下から洩れてくるのを聞くと松本近郊の農家に休んでいる様な氣がしてネパールまで飛行機で飛んできたような氣は全然しません。

唯違ふのは低い山あいの彼方にガネツシュやランタンヒマールの白い山肌の一部が見えるくらいです。

未だ政府と本格的の交渉にまで至る段階には達していませんが、マナスルの來年の許可は大丈夫の様です。他の國も申込んでおりません。本年の來征 Party は次記の如く澤山ありますが目下何れも山の中で攻撃に酣と云う所でしょう。

1. Melunste (Everest の近く)
—英國隊 (Leader は Gregory)
2. Makalu——ワラシス
3. Himachuli——ケニヤ隊
4. Jugal Himal——スコットラ
ンド婦人隊
5. Langtang Himal——スイス
ジュネーア (Himalayan Com-
milee)
6. Lhoise——スイス、オースト
リヤ隊
7. Gangapurna——イタリヤ
8. Annapurna——ドイツ
9. Kanchenjunga——英國
10. Masherbrum——ニュージ

5. Langtang Himal には例
のエベレストのスイス隊の時、登
頂す前に引返したランペールが仲
間と今度とは簡単に二人でやつて来
ているそうです。Langtang Him
al という山はここから約6日位
の距離の所にある同名の村から登
るのだそうですが、そこまで行け
ば氷河の山も目前に迫って見えし
から行つてみたらと勧められまし
たが、どうも日時が許しそうにも
ありません。

その村で Schutless と云うスイス人がチーズを作っているそうですが、その Schutless が最近その村に歸るので一緒に行つたら如何うかと勧められていますが、先日、當農林省で Schutless 氏に偶然會いました。が如何にもスイス人らしい、人の好きうなでした。Lan-
stang Himal はチベット境の 7500 呎位の山です。二人位でスイスからやつて来て軽く楽しんで行く様な連中は羨しい限りです。それにしても、スイスから来て、あ

んなところでチーズなんか作っている連中もあるかと思うと羨しい気がします。

Langtang Himalへの道は例のチベットのキロンゾンへ越える道を途中迄行く道でもあり、大いに我々の氣を引かざるを得ないのですがどうしても時日が許しそうにもありません。ここに待つくらいでもありまして8日位で氷河の低い山を樂しめる旅は未だいくらでもありそうです。

山本朋三郎

現在までに判明した南ア靜岡縣側、特に赤石以南の情報をお知らせします。小生第十二回国體準備専門委員會の中、施設と演技とを命ぜられ、山のみでなく野球場などのラグビー場だのの視察や何かで多忙をきわめています。

昨年度請負が手を抜いたので根本的に補修することになりました
(縣觀光課談)

丸太の壁の隙間をブリキ板にてふさぐ。屋根へペンキを塗る。

△仁田池小屋

昨年十一月小生視察登山報告に
基き縣にて改めて改造を井川村に
申渡し、雪だけを待つて今夏シー
ズンに間にあうよう強行する。場
合によつては現在の露營地より百
米くらい仁田岳側に下つた盆地に
なるかも知れません。(井川村談)

△鳥小屋尾根新道

昨年十一月六日完成。視察の結果、大ブナ崩の頭まで完全に千鳥をかけ、仁田渡に簡単な架橋を行い現在沼平小屋真下のはね橋から直接仁田渡へ行けるようにする。
(井川村役場談)

一、高山裏露營地、聖平小屋と同型とする（井川村の分）

大無間山三陣池畔へ、三陣池小
屋右と同型（上川根村の分）
△本年度開拓新登山路
大無間山—小無間山縦走路

近く實地檢分に登山します。
光岳―大根澤山―大無間山
右に同じ

本年の新道は今シーズンには間に合わぬかも知れませんが、できるだけ強行させて記録及び指導標の大きさ、位置等を縣下岳連傘下の團體に依頼して完成させるつもりです。

△信濃俣河内の登山路
補修費僅少ですむ場合は井川村
でこれも行います。六月頃村當局
で調査登山をし、その結果により
本年秋には着手されるかも知れま

せん。
△光岳方面

光小屋 完全倒壊（小屋番櫓田雄作氏より小生宛四月十五日來信）柴又小屋上鐵砲跡（大井川親光協會で吊橋を架けるとのこと、昨年基礎コンクリ打込み完了）大井川親光協會伊藤氏談

△基本會費 年額八〇〇圓

△ルーム維持費 年額一〇〇圓
千葉、埼玉、神奈川各縣居住會

員は九〇〇圓を、東京在住會員は支部費一〇〇圓を加え一〇〇〇圓をお納入下さい。

△地方會員 八〇〇圓
△入會金 五〇〇圓

團體加入は従來通り、代表者として入會差支えありません。

會の財政は別掲收支決算で判りの通り二〇〇名餘りの會費滯納者があるため悲觀すべき状態であ

ります。支出の項目も出来るだけ冗費をはぶいています。これ以上支出を切つめることは本會の活動

を阻害するおそれもある。それ
れわれ役員一同更に創意工夫をこ
らすことは勿論必要ですが、會員
各位におかれても前記會計狀態を
篤と御賢察の上、本會運営のため
會費はなるべく早目に御納入下さ
るようお願いいたします。

御送金の場合は振替口座東京四八二九番を御利用下さるのが便利です。會費未納の方には誠に残念ながら「會報」や「山岳」並びに種々の御案内も中止せざるを得ないこともありますから御諒承願います。

「山岳」のバックナンバー

戦後發刊された「山岳」は若干殘部があります。會員の方には割引頒布しますから成る可く早目にお申込み下さい。一冊一五〇圓

山
な
み

—隨筆集—
いよいよ出来上りました。
ルーム又は茗溪堂に早急にお申込み下さい。

茗溪堂

第一六四回小集會

三月二十五日(金) 於體協會議室「マナスル及びガネツシュ登攀に於ける人體についての醫學的考察」 醫博 辰沼 廣吉

一九五三年、五四年のマナスル及びガネツシュ遠征に参加、醫事を擔當された辰沼隊員が現地にて集められた各種のデータにより、高度に於いては如何なる體質が適しているかと言うことを究極の目的としての研究報告であつた。もとより今回の報告は最終的のものではなし、糸口をつけた程度であると言われたが、今後に興味をもてる研究の報告であつた。遠征参加隊員の一人として擔當任務の報告は當然の責務とはいへ、學界への報告に先だつて講壇にたたれた辰沼氏に感謝するとともに、今後の研究の成果を期待する。(交野記)

會務報告

三月役員總會 九日(水)於ルーム出席者 榎會長・日高・松方副會長・理事・成瀬・渡邊・金坂・沼倉・初見・外山・折井・今村・吉阪・評議員・辻・岩永・監事・石原・加藤

議事
一、一九五五年度理事改選の件
二、會長交替の件
三、常務理事・常任評議員中より選衡委員を選び推薦のこととする
三、第十回國體登山實施要項改正の件
國體参加希望團體は各都道府縣體協を経由して、J・A・C國

體登山委員會に登録して参加資格を取得することとし、岳連にもはかりこれが處置を早急にすることとする。

報告

一、高校生を対象とする登山講習會開催の件
四月役員總會 十三日(水)於ルーム

出席者 榎會長・理事・成瀬・渡邊・交野・小原・沼倉・金坂・初見・外山・千谷・折井・評議員・沼井・神谷・西堀・村井・監事・石原・支部長・石川支部池田・外 辰沼

議事

一、一九五五年度會員總會の件
四月二十三日(土)午後二時より體協會議室に於いて開催のこととする。

二、一九五五年度役員改選の件
左記諸氏を理事に推薦し會員總會に諮ることとする。

別宮貞俊・入澤文明・成瀬岩雄・渡邊公平・交野武一・沼倉寛二郎・金坂一郎・今村正二・小原勝郎・千谷壯之助・吉阪隆正・折井健一・外山義夫・村山雅美・村木庸益・辰沼廣吉・山田二郎・大塚博美
三、會長改選の件
別宮貞俊氏を推薦することとする。

四、圖書委員及び山岳編集委員の件各擔當理事一名の外に圖書は初見氏「山岳」は島田・田邊・望月氏に依頼の件は再検討のこととする。
五、一九五五年度決算(別掲)並びに一九五五年度豫算の件報告

一、一九五五年度マナスル登山計畫の現況 榎會長
ネパール政府に對し「本年度登山隊の派遣は準備不十分の爲中止の旨を打電し、近く現地事情の確認と來年度登山許可の留保方を交渉のため西堀・成瀬兩氏をネパールに派遣のことになった。右費用は毎日新聞社より支出されることに決定された。
二、信濃支部冬山技術講習會出席報告 折井

★山岳刊行遅延の

お詫び

「山岳」第四九年の刊行が諸種の事情により年度内にできなかったことを深くお詫び致します。漸く校正も完了いたしましたので、六月初旬には會員各位のお手許に届けられると思ひます。
(交野・吉阪)

圖書基金寄附(敬稱略)

▽壹千圓 牧野文子
▽貳百圓 石坂久忠
累計 金壹萬八千八百圓

寄附金(敬稱略)

▽貳千圓 日本興業銀行

地方在住會員へお願い

各支部より、最近次のような希望が寄せられておりますから事情の許す限り御協力下さるようお願い申し上げます。

地方在住の方で、支部に入つていられないため連絡がとれず行事を行う場合非常に困るし、またそのため優秀な會員を擁しながら活潑な支部行動が採れないから出来るだけ支部の方に入つて欲しいということです。よろしく。

昭和卅年五月廿八日發行

東京都千代田區
神田駿河臺四ノ六
社団法人 日本山岳會
發行所 法人 渡邊 公平

編集者 渡邊 公平

電話神田(25)八九五二番
振替口座東京四八二九番
東京都港區赤坂溜池五番地
印刷所 株式会社 技報堂

たかはし

名人気質の店

本店、四谷、大蔵省横入ル
TEL. (03) 1912
支店 八重州口第2鉄鋼ビル前
TEL (07) 1560

登山用品



東京・新宿駅前

かずみ

TEL (35) 2959・6711

みんなのコース **三ッ峠** 紅葉台 パノラマ台 石割山

ハイキング直通電車
東京発23時33分(休日前夜)

ハイキング臨時バス
各コース行、河口湖発4時(休日)
(石割山は富士吉田発)

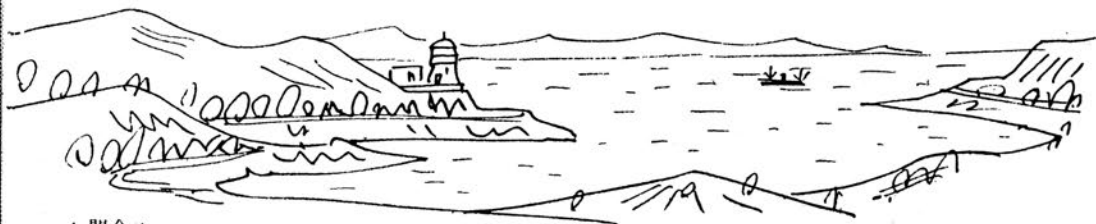
お問合せは……東京支社(20)4076・案内所(37)9644

富士山麓電鉄



何時も楽しいハイキング! 三浦半島と南房総へ

三浦半島一周コース 品川より廻遊券 390円
南房総鋸山コース…………… 390円
観音崎灯台コース…………… 210円



お問合せ

T (49) 0263 京浜品川案内所
E (57) 7111 銀座電鉄ガイド
L (27) 3551 日本橋白木屋案内所

品川より **京浜急行**

PRICE LIST 進呈

登山とスキー具

イワタ

東京 中央区日本橋江戸橋1-7 TEL(27) 7 6 8 6

秀	山	荘
	Ski と 山 の 用具	
プライス・リスト 進呈 電話東京(28)8456・7414 (事務所用) 中央区横町1の1 東京駅・八重洲口ヤンマービル横丁		